

仮設住宅における支援者の意識変容

～岩手県気仙郡住田町を対象として～

The change in the supporter's consciousness of temporary housing

—a case study of Sumita-town, Iwate Prefecture—

時空間デザインプログラム
09.19275 濱田 瑛子 Eiko Hamada
指導教員 土肥 真人 Masato Dohi



1. はじめに

1-1 背景と目的

仮設団地への支援は、個別訪問や自治会運営、イベント開催など多岐にわたり、支援活動の実施には地域の組織や外部ボランティア組織など様々な組織の関わりが欠かせない¹⁾。組織が連携し協働することで幅広い支援が可能となるが、支援者により支援の動機や活動や役割、住民との関係性も異なる。また、時間の経過と共にニーズや活動自体も変化していく。本論文では、このような背景をもつ仮設住宅への支援活動において、支援者の意識の変容を明らかにすることが目的である。対象としては、仮設住宅へのコミュニティサポート活動が実施されている岩手県気仙郡住田町での取り組み²⁾を1つの事例としてとりあげる。なお、先行研究としては、大島による研究³⁾があるが、これは福祉の専門職を対象としたものであり、支援に関わる多種の組織に属する支援者の意識を分析したものではない。

1-2 研究の方法と構成

論文の構成は、2章で本研究の対象地である岩手県気仙郡住田町の概要と仮設住宅の支援活動の実態について把握する。3章では、支援者に対するヒアリング調査をもとに、時期ごとに支援活動を通じた意識の傾向をみる。そして第4章では、支援者個人に焦点をあて支援活動を通じて得たものとそのきっかけの関連性を分析し、第5章で結論を述べる。

2. 仮設住宅に関わる支援組織とその活動内容

2-1 対象地の基本情報

住田町は岩手県の南東部に位置し、人口約6300人で町の面積の9割を森林が占めている。住田町としては震災の被害を受けなかったが、気仙地域として被災した陸前高田市や大船渡市と社会的なつながりが深く、震災後、積極的に復旧にむけた支

図1 仮設住宅の位置と支援に関わる組織

援を行ってきた。震災発生当日に災害対策本部が設置され、翌日には町の消防団が沿岸地域に派遣し食料や物資の提供を行った。同月14日に住田町の林業を活かした木造仮設住宅の建設が決定し、4月になるとNPO愛知ネットがボランティアの活動拠点となるトレーラーハウスを設置、また住田町大股に災害ボランティアセンターが開設した。5月には仮設住宅への入居・引渡しが完了し、翌月に仮設支援協議会が立ち上がった。

住田町の仮設住宅は3箇所あり、間取りはすべて2DK、団地規模は63戸、13戸、17戸と小規模な団地と中規模の団地に分かれる。【図1左】集会所はすべての団地に設置されている。

2-2 住田町の支援活動と支援者の組織ネットワーク

支援に関わる団体は、町の災害対策室と保健福祉課、NPOやボランティア団体、社会福祉協議会、周辺地域、各団地自治体である。総勢で10名以上が常時支援に関わっており、必要に応じて応援メンバーを加えて活動を行っている。活動開始時期については、行政や周辺地域は入居時から開始しているが、その他の団体は遅くとも2か月以内に支援を始めた。役割をみるとおおむね各組織で分担がなされている。【図1右】

3. 仮設住宅に関わる支援者の意識

3-1 ヒアリング調査の概要

本章では、ヒアリング調査を用いて住田町の支援者を対象として支援活動に関する意識について明らかにする。ヒアリング調査日時は2012年11月6日から13日まで、各対象者に1時間実施した。対象者は前章で示した支援に関わる人の計11名に対して実施した。方法としては、具体的な質問項目を指定せ

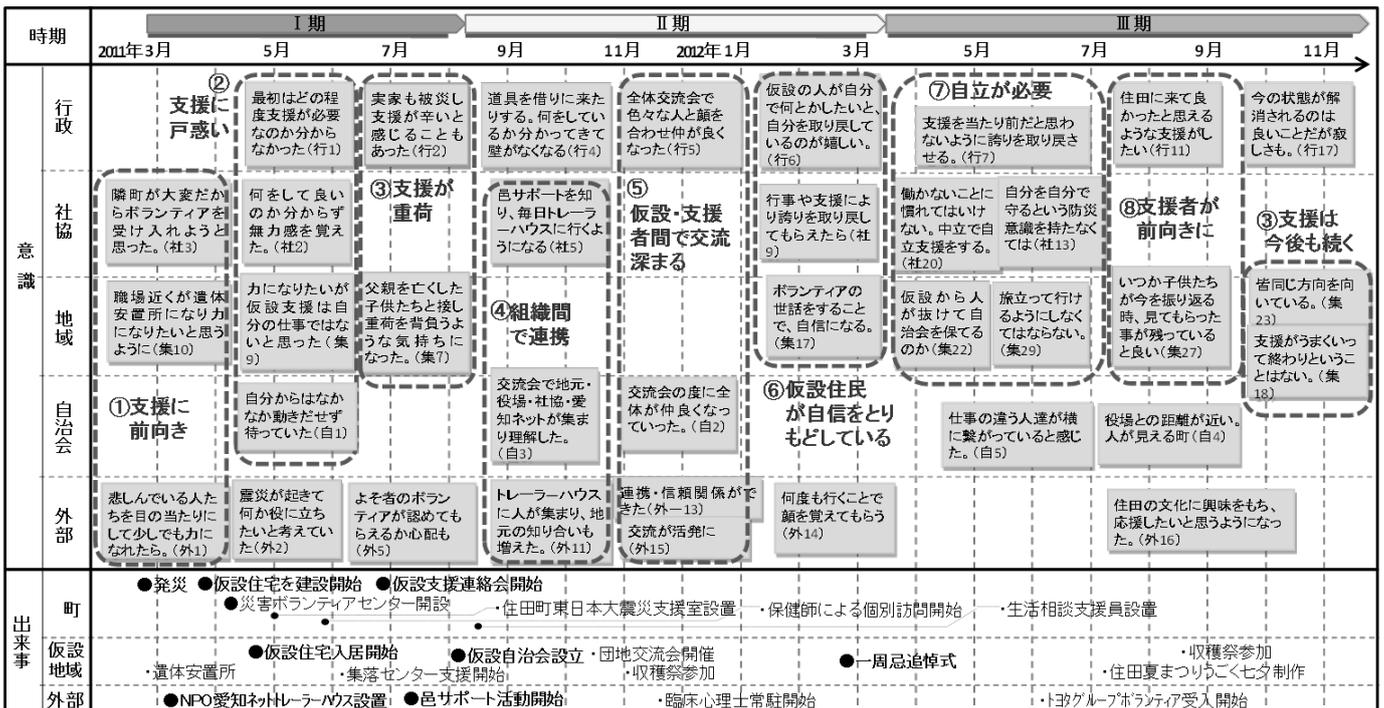


図2 支援活動と支援者の意識の変遷

ず、仮設住宅で起こった支援実態の簡単な年表を用意し、被験者が行った支援の実態、そこから想起された意識、またその支援により得た物について模造紙に書き込んだ。

3-2 時期別に見る支援者の意識

震災から仮設住宅の自治会創設前までを第1期、自治会設立から震災1年までを第2期、震災1年から現在までを第3期と区分しその時期ごとの意識をみる。【図2】

第1期では、震災への支援という今まで直面したことがない事態に対し様々な意識の違いが見られた。住田町は被災しなかった大船渡や陸前高田が甚大な被害を受けているので力になるという支援に対して「①前向きな思いを持つ人」もいれば、「②どう支援すればいいか戸惑う」支援者もいれば、実家が被災していたり、支援に巻き込まれる形で関わることになり「③支援を重荷に感じたりする人」もいた。団体別に見ると、特に、地域の支援者にとって支援は仕事の範疇でなかったためどこまで踏み込んでいいかわからないという状況があった。自分たちの仕事の領域に仮設住宅が出来た為、ぶつかった問題に対処をしている内に自然と深く関わるようになった。

第2期では、1期から継続して活動を行う中で支援者や仮設の住民が交流しながら、互いを理解していく時期となった。外部支援者の拠点での交流等により、「④支援組織間の連携」が進んでいった。また、仮設住宅に自治会が発足し、住民を集めた交流会が行われるようになり、「⑤支援者と住民間で交流が深まる」機会となった。また、この時期に特徴として見られることは、被災者自身が主体的に行動し「⑥自信や誇りを取り戻している」ことを各団体共通して意識している点が見られる。

第3期では、各団体とも支援にあたりながら被災者が今後仮設を出ていくことを意識している。仮設団地を出て行くための「⑦自立支援の重要性」や人が少なくなっていた場合のコミュニティ支援への懸念が意識されるようになる。この時期になると、当初、支援に戸惑いを覚えていた地域や行政の支援者も「⑧支援に前向き」になっている事が分かる。一方で、それまでに構築された支援を楽観的に評価する事はせず、冷静に「⑨支援を継続していく」必要性を再認識している意見も見られた。

第4章 支援者の得たものとそのきっかけ

4-1 支援者の得たものとそのきっかけの分類と関係

ヒアリング結果より、住田町の支援者が支援を通して得たものとそのきっかけを抽出し、それぞれについて分類を行った。支援者の得たものは知識や経験、人との縁、前向きな気付き、

自信や誇りの4つに、そのきっかけは逆境、新しい体験、交流の広がり3つに分類された。その関係を【図3】に示した。

4-2 支援者の得たものとそのきっかけの関係の分析

社協の支援者は各々支援内容が異なり得たものとそのきっかけも1人1人異なる。行政の支援者の得たものとそのきっかけは、学生ボランティアや仮設住民との交流であり、得たものは今後の仕事にとってプラスになるものを挙げている。集落センターの支援者は交流の広がりから自信や誇り、新しい体験から自信や誇りと前向きな気付きを得ている。外部の支援者は新しい体験から人との縁と知識や経験、逆境から知識や経験を得ている。

集落センターの支援者の得たものは、自信や誇り、前向きな気持ちのように内面に影響を与えるものである。一方で外部の支援者は人との縁、知識や経験のように外的なものが挙げられた。集落センターの支援者は震災による人の流入を地域として受け入れる立場であり、外部の支援者は支援を目的として住田町に活動しに来ている。そうした背景からこのような傾向が見られると考えられる。

震災が起こって住田という町に仮設住宅が出来て、地域が受け入れ、外部の支援者が住田町に来た。地域の支援者の中には始め戸惑いや苦しみを感じる人もいた。しかし外部の支援者と連携し、仮設住民と交流が深まり、支援者の意識は変わっていった。こうした意識の変遷の背景には、与えるだけの支援ではなく支援者にも支援を通じて返ってくるものがあつた。仮設住宅を受け入れた地域、また外部の支援者は様々なきっかけでこれからの人生に糧となるものを得た。

第5章 結論

本論文の結論は以下の2点である。

- ①支援者は、初め支援への戸惑いもみられたが、支援者間の連携、仮設住民との交流を経て現在は皆前向きに支援をしている。
- ②支援者は支援活動を通じて、前向きな気づき、知識や経験、人との縁、自信や誇りを得ており、そのきっかけは交流の広がりや新しい体験、逆境であった。また支援組織ごとに得たものやきっかけについて傾向がみられた。

【参考文献】

- 1) 仮設市街地研究会 (2008)『提言！仮設市街地』学芸出版
- 2) 古山周太郎ら (2012)「応急仮設住宅団地における協働型コミュニティ支援に関する研究：岩手県気仙郡住田町の仮設支援協議会を中心とした支援活動より」都市計画論文集 (47), 361-366
- 3) 大島隆代 (2009)「災害時支援における支援者の意識変容過程—社会福祉実践領域および関連領域で専門的役割を担った支援者へのインタビューの分析から」コミュニティソーシャルワーク (4), 67-73

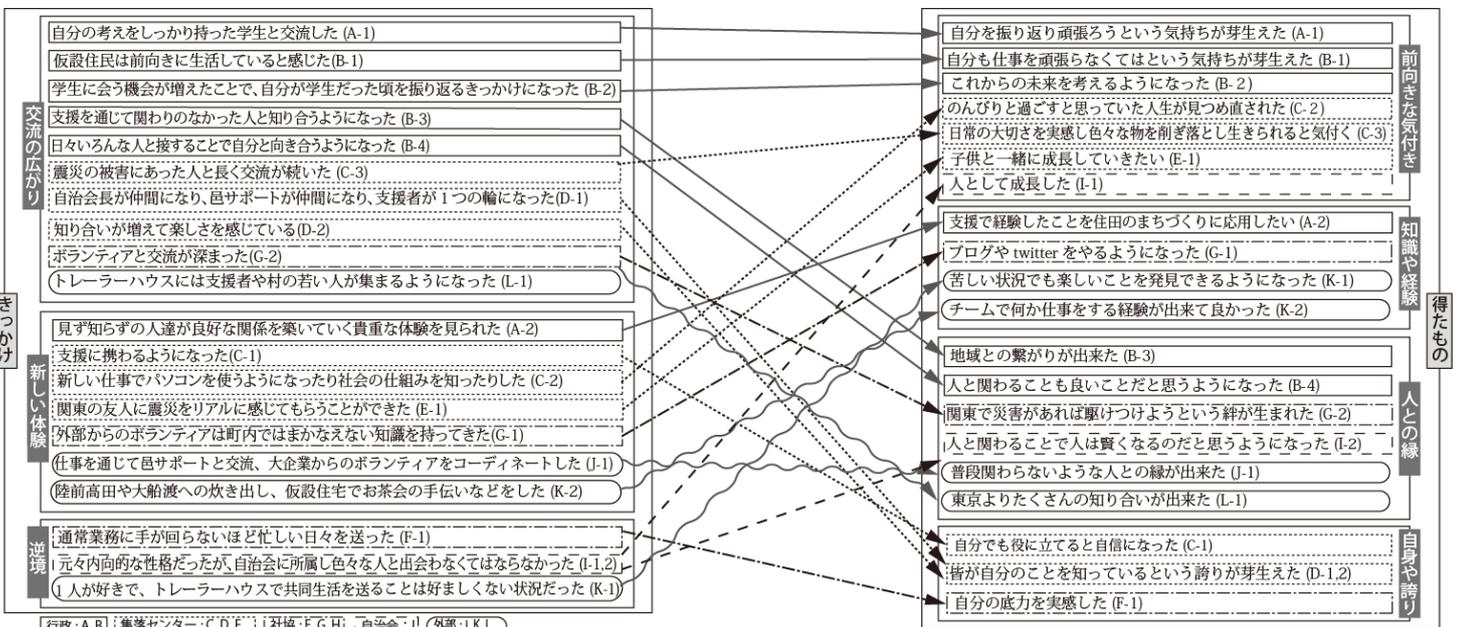


図-3 支援から得たものとそのきっかけ